町村誌の在り方

杉　原　丈　夫

戦後多数の町村誌が刊行された。読みくらべると、編集方針にそれぞれ特色があり、編さん者の個性が感じられる。あるものは歴史編・地理編・社会編というように整然と章節を区分しており、あるものは部落ごとの郷土誌をもつて構成されている。あるものは一般史から説きおこし、あるものは各分担執筆者が自分の好きなことを書いている。いずれも長所短所があり、簡単にどれがよいなどといい難い。

しかし総じていえることは、歴史的回顧が多く、現在性が弱いということである。市町村民の大多数が関心をもつているのは現在のわが町わが村である。しかるに編集者の多くは郷土史家であつて、村の現状分析よりも過去の詮索に興味をもつているようである。

先日調査団の一員に加わつて和泉村の水没地へ出かけた。自動車の車窓から見る伊勢川峡谷の風景は美しかつた。この風光もやがて水没する。村の人の記念のために、この風景をカラー写真で、できれば映画にして、記録すべきだなと思つた。そしてもう遅いが、一年ぐらい前から準備して、秋の紅葉、冬の雪景色など、四季それぞれに写しておきたい。

風景だけではなく、村の集落のたたずまい、盆や正月の行事、嫁入りや葬式、服装と食事、春と秋との季節作業、その他村の現在の生活を写真に記録して村誌を編さんしておくとよい。その夜わたしは一行と離れて、村のある家に泊めてもらつた。わずか一泊であるが、そこでの午後から夕方、夜、そして朝の生活と仕事の一端をわたし自身の網膜にしつたり写しておいた。村当局がしないならば、せめてわたしだけの記憶にとどめておきたかつたからである。

ところが翌日宿舎へ帰つたおり、和泉村では四百万円の予算で村誌を編さんするという話を聞いて驚いた。水没予定地の村落は大半もう立退いてしまつている。今からでは立退以前の状態を調査したり撮影したりすることは不可能である。昭和四〇年のことがもう直接にはわからなくなつている。たとえば昭和四〇年某月某日某区のある家では何を夕食にたべていたか。住民の生活の基礎である衣食住さえ現状を目で見ることができなくなつている。

おそらく過去の文書や遺物によつてりつぱな村誌が編さんされるであろう。しかし村の生きた現状についてはほとんど何も書かれないのではなかろう。いつたい町村誌とは何か。何を記録し、何を調査して後世の村民に伝えようとするのか。村が消滅しようという事態に直面して、漫然たる伝統的村誌では意味がないのでなかろうか。

既刊の町村誌の多くは、緑の野原の中でわざわざ枯草をさがして食つている馬である。目の前に生き生きとした現実があるのに、それにはことさらに目をそむけて、いたずらにもうわからなくなつた過去ばかり調べようとする。個人の研究ならばどんな内容でもよい。しかし公費で刊行するということになれば、いつたい何を調べて書くのか、その目的と性格を明らかにしなくてはならない。

やはり和泉村のことであるが、ある老人と話していると、彼は話のあいだあいだに

念仏をしている。わたしはこの老人の宗教心を知りたいという強い衝動にかられた。しかしそれは分担を命ぜられたわたしの調査事項にないので自制した。昨年この村の野尻道場が問題になり、何人かの学者が調べに来た。村誌ができればおそらくこの村の真宗史の資料として記録されるであろう。しかし目の前に生活しており、この秋には和泉村を去るこの老人の信仰内容、彼の宗教遍歴、そしてこの村の人一般の宗教的精神状況というものは調べられることなく、水没してしまうであろう。郷土研究の眼は、道場の建物とか聖人の絵像とか過去の遺物にのみ向けられていて、現在の人間の生活と精神には向けられていないのである。

ところで仮に町村の当局者が町村誌の在り方に理解をもち、頁の大半を現状の調査にあてることにした場合、どういうことを書いたらよいか。役場の統計をただ羅列しただけではいけないであろう。村内のあちこちを写真に写すのみではだめであろう。編さん者に現代的な感覚、社会科学的なセンスが必要である。従来町村誌の編集者は郷土史家であつたが、今や史家では役に立たない。年少気鋭の社会科学者を編集主任の地位にすえるべきではなかろうか。

また和泉村の例で恐縮であるが、先日の調査に、福井新聞社から記者とカメラマンが派遣され、数日後に記事と写真が大々的に新聞にのつた。だがまことに失礼な批評になるかも知れないが、その写真には社会科学的感覚が欠けているように思われる。人間のドラマというものが写されていない。しかしこれは必しも新聞社のみの責任でなく、調査団自体がそういう現代的感覚のある調査をしていないのである。それにしても新聞記事として何か社会的なもの、人間的なものが欠けている。記者やカメラマンでさえそうである。一般の郷土史家の感覚のズレは救い難いものかも知れない。

そんな偉そうなことをいうなら、お前がどこかの町村誌を書いてみよといわれるとまことに困る。わたし自身社会科学者でないからである。新しいタイプの町村誌を実際に作るのならば、何人かの研究者が集団で試行錯誤的にやってみるよりほかに方法がない。

町村誌とは異なるが、先年「若狭路」という郷土誌が出版された。全文写真ばかりである。内容は民俗行事や名勝、文化財が多く、どちらかといえば回顧的内容だが、産業や村民生活を取りいれ、現在の時点における何ものかを伝えようとしている。これをもつと社会的、人間的にして、ちようどNHKの海外取材班の映画のようにしていけば、新しい町村誌の一つのイメージになるかも知れない。

近ごろの町村誌には戦没者の写真を全員のせているものがある。これも大戦の惨禍の一つの記録であろう。しかしその取扱いは、いわゆる郷土の名誉、英勲という考え方である。残された戦争未亡人や老父母の二十年の労苦と嘆きというものは町村誌の表面には出てこない。社会的センスというのは、こういうものを指すのかも知れない。

考えて見れば、町村誌も一つの芸術作品かも知れない。へたな小説は数万行費しても、生きた人間を描いていない。数百頁の大著でありながら、村の現実の生活を何も描いていない町村誌だつてありうるのでなかろうか。